

### 国際協力発の 新しいアイデアを発信したい

日本からは、物理的にも心理的にも遠いアフリカ。JICAエチオピア事務所の山下英志さんは、この土地の人々の良さを引き出し、日本に発信していきたいと、現地の人々と共に新たなアイデアを生み出すべく奮闘している。

#### 初めて知った 電気も水道もない世界

出身は熊本県天草市。大学で上京するまで海外に触れる機会がなく、国際協力とは無縁の生活を送っていました。将来は何か資格を取って国内の仕事をしようにと考えていましたが、そんな人生にどこか疑問を感じていて自分にも気付いていました。そんな時、大学の友人に誘われてインドのスタディーツアーに参加。大学1年の夏、運命の出会いでした。

初めての海外、しかもインド。それはもう驚きと発見の連続でした。農村部は電気も水道もない生活。それまで日本のことしか考えていなかった私は、そんな生活をしている人々がいるなんて想像もしなかった。その分、衝撃も大きかったです。

それからは大学で「国際」と名の付く講義をとにかく受講し、自分で国際問題について考えるサークルも立ち上げ、将来は国際協力をライフワークにしたいと思うようになりました。

まず考えたのが、開発コンサルタント。国際協力の最前線での仕事に魅力を感じていましたが、修士号や実務経験が必要で、その時点ではハードルが高かった。そこでたどり着いたのが、日本の政府開発援助（ODA）を担うJICAでした。

#### 日本の地域とアフリカをつなげる

実は就職する前から、国際協力に真正面から携わるならアフリカと決めていました。1年目の研修では、念願かなってケニア事務所へ。それまで「アフリカ＝貧しい」というイメージが強かったのですが、首都ナイロビは想像を超える大都会。一方で農村の生活は貧しく、農作業に懸命に汗を流す人々の姿が印象的でした。

それ以降もアフリカどっぷりです。アフリカ部で印象に残っている仕事の一つは、福島県が舞台のガーナを対象にした研修。福島出身の野口英世が黄熱病の研究中に最期を迎えたのがガーナ。現地では彼の遺志を受け継いだ医師たちにより研究が続けられています。その縁をさらに深めるべく、農業や産業振興など、地元の強みを生かした3年間の研修を福島の方々ゼロから企画しました。日本には海外に伝えるべき誇れる技術がたくさんある。その、職人魂を引き出すこともJICAの仕事だということを知りました。

#### これは、あなたのプロジェクト

エチオピア事務所を担当する分野の一つが保健です。地方には水道もない、トイレ



JICAエチオピア事務所  
**山下 英志**  
YAMASHITA Hideshi

2006年にJICAに就職。青年海外協力隊事務局、ケニア事務所、アフリカ部を経て、2010年11月より現職。

もないといった家が多く、衛生への意識が高まらないのが現状。感染症にもなつて当たり前という考えすらあります。そこで、JICAは現地の保健省と感染症予防のためのデータ収集と分析に取り組んでいます（8ページに関連記事）。



アフリカ部で担当したリベリアの電力プロジェクトの関係者と山下さん(左端)

私はどのプロジェクトでも自分から答えは出さず、現地の人たちと一緒に考えるプロセスを大切にしています。そしていつも、これはあなたのプロジェクトだと表現するようにしています。JICAがかかわれるのはわずかな部分。彼らの手で進めていかなければならないからです。エチオピア人は真面目で、それゆえに頑固なところもあります。そんな彼らの歯車がスムーズにかみ合うスイッチ、がどこなのか、日々模索しています。

国際協力も、人あつての活動です。途上国の人のために、いろいろな人とかがわり合う仕事にやりがいを感じています。日本の国際協力として、iPhoneのような世界を席巻する革新的なアイデアをいつか発信したいと考えています。



エチオピアの官民の関係者と議論する山下さん(左奥)。さまざまな関係者との意見交換がより良いアイデアを生む